

2022/6/26

ヨハネの黙示録 講解メッセージ⑭

『ヨハネの黙示録 4章前半 一天上界の様子 1ー』

ヨハネの黙示録には、象徴的な表現が多く使われています。それは、神が住んでおられる場所と、私たちが住んでいる場所では世界が違うため、私たちがこの世界で見ているものにイメージを移し替えて、象徴的な表現にしているからです。

ヨハネの黙示録1～3章は、終わりの日に向けて私たちが注意すべきことが中心に書かれており、第一幕とも言えます。4章からは第二幕が始まり、終わりの日に向かって、何が起きるのかということが中心に書かれています。終わりの日とは、各自が迎える肉体の死のことです。それぞれの時代に適応した内容にするため、ますます象徴的な表現が多くなっていますから、その意味を正しく理解するために慎重に読んでいきましょう。

「その後、私は見た。見よ。天に一つの開いた門があった。また、先にラッパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声があった。「ここに上れ。この後、必ず起こる事をあなたに示そう。」たちまち私は御霊に感じた。すると見よ。天に一つの御座があり、その御座に着いている方があり、その方は、碧玉や赤めのうのように見え、その御座の回りには、緑玉のように見える虹があった。また、御座の回りに二十四の座があった。これらの座には、白い衣を着て、金の冠を頭にかぶった二十四人の長老たちがすわっていた。御座からいなずまと声と雷鳴が起こった。七つのともしびが御座の前で燃えていた。神の七つの御霊である。御座の前は、水晶に似たガラスの海のようなであった。御座の中央と御座の回りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。第一の生き物は、獅子のようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空飛ぶ鷲のようであった。」(黙示録 4:1-7)

■永遠の契約

私たちは、この地上においても神の霊に満たされ、平安を覚えることがあります。それが「御霊に感じた」ということです。クリスチャンは、この世界の不安と恐怖を

感じることもあれば、御霊の平安を感じることもあります。しかし、神の国は、死も恐怖もなく、不安が一切ありません。

天の御座についておられる方は、神です。「神が宝石のように見えた」という表現の注目すべき点は、服や顔など、神の姿を現す描写がないということです。私たちがイメージするような姿を表現するのは難しかったため、ただその素晴らしさを表現するために、このような表現が使われているのです。つまり、神を地上の見えるものに置き換えることは不可能なのです。ですから、神は偶像礼拝を禁止されたわけです。

さて、神の御座の回りには虹がありました。虹は、神が人類に立てられた永遠の契約を象徴しています。そして、その回りの24の座とは、教会であり主の弟子たちです。神が立てた永遠の契約は今も有効ですから、その契約を思い出すように、私たちに示されているのです。

神は、いくつかの永遠の契約を立てられましたが、その最初の契約は、ノアとの契約です。

「わたしはあなたがたと契約を立てる。すべて肉なるものは、もはや大洪水の水では断ち切られない。もはや大洪水が地を滅ぼすようなことはない。」さらに神は仰せられた。「わたしとあなたがた、およびあなたがたといっしょにいるすべての生き物との間に、わたしが代々永遠にわたって結ぶ契約のしるしは、これである。わたしは雲の中に、わたしの虹を立てる。それはわたしと地との間の契約のしるしとなる。」(創世記 9:11-13)

これは、「今後、人を滅ぼすことはない」つまり、「人を救う」という契約です。このことを、虹を見るたびに思い出せと言っておられるのです。

神はその後、その契約の具体的な内容を、アブラハムに示されました。

「わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、そしてあなたの後のあなたの子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしがあなたの神、あなたの後の子孫の神となるためである。わたしは、あなたが滞在している地、すなわちカナンの全土を、あなたとあなたの後のあなたの子孫に永遠の所有として与える。わたしは、彼らの神となる。」(創世記 17:7-8)

それは第一に、「わたしが、あなたの子孫の神となる」ということです。これは、イエス・キリストを信じられるようにして、人を救うということです。

第二に、あなたが住んでいる家をあなたが所有できるようにするという事です。これには霊的な意味があります。

私たちが今住んでいる家とは心を指します。私たちの心は、神の愛という土台の上に建てられています。しかし、その家を所有しているかという、実は所有していません。なぜなら、私たちは愛することができないからです。条件付きなら愛することができても、無条件で人を愛することはできません。また、生まれながらに神を愛することもできません。アダムとエバが罪を犯して以来、死が入り込み、私たちの土地は汚染されてしまったために、本来所有できるべき土地をまだ所有しきっていないのです。

神は、私たちの心に神の愛を満たすことによって、それを再び永遠に所有できるようにすると言っておられるのです。イエス・キリストは、このことを「私が来たのは羊がいのちを得、それを豊かにするためである。」と言われました。つまり神を知るようになり、イエス・キリストとの関係を深く築き上げていくということです。

つまり、永遠の契約とは、私たちを救い、罪を取り除いて、平安を与え、神と人を愛せるようにするという契約です。神の行動はすべて、この永遠の契約に基づいてなされます。

■真のイスラエル

「また、玉座の周りに二十四の座があって、それらの座の上には白い衣を着て、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老が座っていた。」(黙示録 4:4)

アブラハムの子孫から12部族が生まれ、イスラエルという国家が形成されました。そのため、神の契約はイスラエルに与えられたものと思われがちですが、玉座の回りの座は、12の倍数である24です。つまり、この地上でのイスラエルはまだ完成されたものではなく、御座の回りには、神が永遠の契約によって完成させた真のイスラエルを表しているのです。これは、教会を象徴しています。

ヨハネの黙示録は、そもそも終わりの日の幻です。そして、終わりの日に、神は私たちを永遠の契約によって呼び集めると書いてあります。その人々が神のイスラエルであり、真のイスラエルであり、教会だということです。

「終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、国々の民はそこに流れて来る。多くの異邦の民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてください。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。」(ミカ 4:1-2)

「その日、——主の御告げ——わたしは足のなえた者を集め、追いやられた者、また、わたしが苦しめた者を寄せ集める。わたしは足のなえた者を、残りの者とし、遠くへ移された者を、強い国民とする。主はシオンの山で、今よりとこしえまで、彼らの王となる。羊の群れのやぐら、シオンの娘の丘よ。あなたに、以前の主権、エルサレムの娘の王国が帰って来る。」(ミカ 4:6-8)

神は、終わりの日にすべての国から民を集め、強い国の民とし、王国が帰ってくると言っておられます。この預言は、教会を指しています。教会とは、永遠の契約に従って、神を知る者とし、罪を取り除くために、神が人を集めたところです。そして、それは、キリストのからだを指します。

「教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。」(エペソ 1:23)

神の永遠の契約は、ノア、アブラハムに語られ、さらにその後もイスラエルに向かってその具体的な内容が語られたため、イスラエルの中に、我々は特別な民だという勘違いが生まれてしまいました。選民思想と言われるものです。しかし、神は彼らを特別に優れたものとして選ばれたわけではありません。ただ彼らに神の律法を託されたのです。だから神の前では、ユダヤ人もイスラエル人もなく、誰もが平等です。聖書は、はっきりと、神を信じる者は誰もがアブラハムの子孫でありイスラエルであると述べています。

「アブラハムは神を信じ、それが彼の義とみなされました。それと同じことです。ですから、信仰による人々こそアブラハムの子孫だと知りなさい。聖書は、神が異邦人をその信仰によって義と認めてくださることを、前から知っていたので、アブラハムに対し、「あなたによってすべての国民が祝福される」と前もって福音を告げたのです。そういうわけで、信仰による人々が、信仰の人アブラハムとともに、祝福を受けるのです。」(ガラテヤ 3:6-9)

永遠の契約は、決して地上のイスラエルだけの向けられたものではなく、人類すべてに語られた契約であり、その契約に従って集められた信仰の人々、すなわち、イエス・キリストを信じる人こそが、真のイスラエルであり、アブラハムの子孫です。

これに対して、イスラエルの選民思想は、肉によるイスラエルしか救われないと考えます。自分たちは特別なものだから神に選ばれ、特別であるがゆえに律法が与えられた、だから、律法を持たない者は救われず、救いは自分達だけのものだと考えます。こうして彼らは律法による行いを賞賛し、その行いによって人は救われるのだと考えるようになりました。しかし、イエス・キリストは、この考え方を真っ向から否定しました。イエス・キリストは、人は行いによって救われるのではないことを教えるために、パリサイ人と取税人のたとえ話をなさいました。

「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるる者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」（ルカ 18:10-14）

このたとえ話のパリサイ人は、イスラエルを象徴しています。イスラエルはそもそも12部族ありましたが、イエス様の時代にはもう1部族しか残っていませんでした。それがユダヤ人です。ですから、ユダヤ人＝イスラエルということになっていますが、もともとは12部族の中の一つです。なぜこうなってしまったのかというと、彼らが傲慢になったからです。神は、彼らに律法を与えて神の契約を持たせましたが、決して傲慢にならず高ぶらないようにと、何度も注意を与えました。しかし、彼らは傲慢になり、自分たちは特別だという意識を持ち続けたために、国は崩壊してしまいました。にもかかわらず、最後に残ったユダヤ人たちもかたくなに自分たちは特別だという意識を持ち続けていました。

イエス様は、断食をし、献金をし、立派な人間であることを誇り、感謝したパリサイ人ではなく、ただ天を仰いで胸をたたき、「この罪人の私をあわれんでください」と叫んだ取税人を義とされました。

■すべての人に自由が与えられる

イエス様は、人間が持っている誇りを完全に打ち砕き、信仰に生きよと教えておられます。イエス・キリストを信じること、ただそれだけが重要なことです。

人は、自分には選択する自由があると思っていますが、人間ができる選択は、実は二つしかありません。いのちを選択するか、死を選択するかだけです。私たちがこの世で選んだものは、すべて消えてなくなります。それは、何も選択できなかったのと同じです。つまり、イエス・キリストを信じて神のいのちを選択するのか、信じないのか、この二つの選択しかないのです。神の呼びかけに応答し、イエス・キリストを信じる選択をするなら、あなたは生きるものになります。神の呼びかけを拒否し、イエス・キリストを信じない選択をするなら、永遠のいのちを得ることができません。たとえ全世界を手にしても、いのちを失ったら何になるのかと、イエス様は問われました。

私たちが自分のものとして唯一選択できるのは、イエス・キリストだけです。そういう意味で、神の前では誰もが平等です。この世界でどれだけ多くの選択肢を持っていようとも、生まれながらに選択肢が少ない人であろうとも、それは自由や幸せとは関係ないものです。むしろ、イエス・キリストは、「嘆き悲しむ者は幸いだ」と言われました。なぜなら、その人は本当の選択ができるからです。イエス・キリストは、私たちに知識を与えるために来られたのではなく、私たちを救うために来られました。イエス・キリストを信じるなら救われる、この点において、私たちは誰もが平等なのです。

「しかし、信仰が現れた以上、私たちはもはや養育係の下にはいません。あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。もしあなたがたがキリストのものであれば、それによってアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。」

(ガラテヤ 3:25-29)

神が立てられた永遠の契約によって集められた者がアブラハムの子孫であり、真のイスラエル、相続人なのです。肉におけるイスラエル人か否かという区別は、初めからありません。神はイスラエルに託しましたが、それは、彼らが特別だったからではありません。人は皆同じ罪人であり、誰もが二つの選択肢を持っているだけです。そこには自由はありません。

しかし、ここで、神を信じる選択をする者には、ここから無限の可能性が広がります。それは、愛する自由です。私たちは自分で選んで、どこまでも神を愛し人を愛することができるようになるのです。

いのちを持たない者は、終わりしか来ません。私たちが描く夢は、いつか過去になります。過去とは死であって、私たちはこの死の世界から出られません。ここから出るただ一つの方法は、イエス・キリストという未来です。

イエス・キリストはいのちを得させ、それを豊かにしてくださいます。それが、神が立てられた二つ目の契約です。私たちは、その豊かないのちを今生かしているでしょうか。

誰もが神のいのちを手にすることができるという点において、人は皆平等であり、そのいのちを手にしていれば、神を愛し人を愛する自由を得ることができます。愛とは、イエス・キリストを持つことです。聖書は「たとえあなたが全財産を貧しい人に施しても愛がなければ何の役にも立たない」と教えています。つまり全財産を人に施すのは、愛ではありません。愛とは、イエス・キリストを指すのです。イエス・キリストという永遠のいのちを持たなければ、何の意味もありません。そして永遠のいのちを持つとき、あなたは这个世界に無限の可能性を持つことができるのです。

このことを、聖書は一貫して教えているのですが、イスラエルの人たちは、それを否定して、自分たちは特別だと言い続けたため、イエス様もパウロもその考え方と戦ってきました。そこで、イスラエル人は徹底してキリスト教を迫害するようになったのです。

しかし、パウロは、誰もが神の前に平等であり、律法に関係なく救われることを伝えるために、次のように述べています。

「割礼を受けているか受けていないかは、大事なことはありません。大事なものは新しい創造です。どうか、この基準に従って進む人々、すなわち神のイスラエルの上に、平安とあわれみがありますように。」(ガラテヤ 6:15-16)

大事なものは新しい創造であって、律法でも血縁関係でもありません。イエス・キリストを信じる者が神のイスラエルであり、彼らを集めた場所が教会です。それが、黙示録4章で語られている、神の回りを取り囲んでいる24の座なのです。

パウロは次のように語っています。

「肉によるイスラエルのことを考えてみなさい。供え物を食べる者は、祭壇にあずかるではありませんか。」(Iコリント10:18)

「肉によるイスラエル」とは、「神のイスラエル」に対する表現です。イエス・キリストを信じる者こそが、イスラエルだからです。

「神と主イエス・キリストのしもべヤコブが、国外に散っている十二部族への挨拶を送ります。」(ヤコブ1:1)

これは、クリスチャンに向けて書かれた手紙です。つまり、ヤコブは、クリスチャンのことを国外に散っている十二部族と呼んでいるわけです。

「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です。」(Iペテロ2:9-10)

キリストを信じる者こそが、神が立てられた契約に基づいて集められた神の民であり、私たちが集められたのは、この福音を伝えるためであると書かれています。

私たちが受けた「憐れみ」とは、「赦し」のことです。私たちが伝える神のみわざとは、赦しの恵みです。過去が赦されるということ、これこそが私たちに希望を与えます。そして、これこそが私たちが過去から脱出させ、未来に心を開かせてくれる恵みになります。

神の御座の周りにはいる24の座(黙示録4章)が示すもの、それは教会です。教会とは、神が呼び集めた者の集まりです。この世界に死が入ってから、人類は神がわか

らなくなりました。その人類に対して、神が立ててくださったのが永遠の契約です。死の世界に閉じ込められ、自由を失った人類に対して、神は、神が与えるいのちを選択するように呼びかけておられます。その呼びかけに応答して集められた者が、真のイスラエルの12部族であり、この地上では教会を指しているのです。それが、黙示録4章の冒頭の内容です。

つまり、私たちは神の約束に従って救われたのであって、何か立派だから救われたわけではありません。ということは、何かができる者が救われるわけでもありません。ただ神の差し出す御手につかまれば、誰でも救われ、死の世界からいのちを得、未来という可能性が広がっていくのです。